

幽玄

題字
高秀秀信横濱市長

横浜能楽連盟
会報 No.16
平成10年11月7日

横浜能楽連盟『神奈川文化賞』受賞！

会長 新堀 豊彦

本連盟は本年(平成十年)、創設五十周年を迎え、七月の横浜能楽大会、十一月七、八日の記念「横浜能」、そして記念出版「お能と横浜」など、多彩な事業を展開して来たが、九月二十八日付で、岡崎洋神奈川県知事、森本敏男神奈川新聞社長の連名で、平成十年度の「神奈川文化賞」を授与する旨の通達を



受けた。

全く予期していなかった名誉であり、昭和四十三年、第十八回「横浜文化賞」を受賞した実績はもっているが、地方の文化活動の貢献に対する表彰としては、まさに最高の荣誉ともいえるべき「神奈川文化賞」が、五十年の歴史の上に、もうひとつ大きな輝きとしてプラスされたことは、この上もない喜びである。連盟会員全員の、永年にわたる御支援と御協力に対し、紙上を借りて篤く御礼申し上げる次第である。

「贈呈式」は十一月三日、文化の日、県民ホールで行われたが、連盟としては、十一月八日第四十六回「横浜能」終了後、五十周年祝賀のパーティを開催、「お能と横浜」の出版記念と、この栄えある受賞のお祝いを併せて行う予定である。

なおこの受賞については、横浜及び横浜能楽堂の御推薦と

御支援があったものと推察され、御高配に対し感謝の意を表するものである。

この受賞を機に、我々はさらに、横浜の能楽界の新しい手としての自覚をより強め、比類ない「能」の普及発展、そして、我々自身の研鑽につとめ、受賞に対する責任の重さに応えてゆかなければならない。

盛大裡に

五十周年記念能楽大会

五十周年の記念大会となった第十四回横浜能楽大会は、例年の大会での演し物に加えて素人の会員による能四番をとり入れ、七月七日、八日の二日間開催された。両日共、見所は満席となり、盛大な拍手が送られ演者もさることながら企画運営に参加した連盟役員も安堵し、今後の運営に参考になった。

能に出演のシテ四人の方に舞い終えての感想を寄稿して頂いた。

能「清経」を舞い終えて

横浜金剛会 望月 悦夫

一年前に、この大会で能の出演が決まった時、横浜能楽堂のあの舞台上で多勢の観客を前にしての自分の舞姿を想像して嬉しさを抑えて胸をふくらませた。

私は入門取立てからの恩師田村信一郎先生を四月に亡くしたばかりで出演は無理と思っていたが、一門の先生方から励まされ、亡き先生への恩返しのためで演らせて貰うことにした。

指導師範の山田純夫先生の推選曲は清経で祝言にふさわしくないが能楽連盟の了承を頂いた。七月から始まった一年間の稽古は仕舞から入ったが、気品と幽玄を備えた武人を表現する長い長いクセの舞と、太刀を抜いての目まぐるしい型のキリの所作は稽古が進む程に自信をなくしていった。せめて構えと運歩だけでもと思い直して、時と場所を選ばず感じをつかむことに努め姿見を相手に汗を流した。

運歩が多少楽になった頃、型の方もまあまあと言って貰えるようになったが不安は残っていた。その頃、先生の社中の発表会で、高齢になってから始めた女性の、気を込めた仕舞を拝見して大変感動し清経への心構えを教えられた。

大会当日は見所が満席になり、お調べが始まったが鏡の間では意外に不安は感じなかった。しかし、面をかけて、「お幕」で橋がかりへ進んで重心の在りかが判らなくなり足がすべらず、不安が戻って舞台手前で正面を向

いてしまった。常座に立った時、正面最前列に、初めて能を見る友人だけが目に入り、諷い出しは彼に話しかけるようにサンを誦い自分を取戻すことが出来た。あとは稽古通りには出来ないことは覚悟し気を抜かないことだけ念じて、暗舞台で舞っていることの幸せを感じつつ留拍子を踏んだ。

幕のかけで平伏して迎えてくださった後見面に面を外してもらい、床几にかけて三役のご挨拶を受けた時は感謝と舞い終えての感激を、一時間余りワキ座で下に居て胴着まで汗に濡らしたツレの中村悦治さんと分かち合うことが出来た。



能「猩々」を舞い終えて

海語会 平野 元弘



昨年五月、広井徳平さんから「来年は横浜能楽連盟創立五十周年記念の年にあたる。平野さん能狸々を舞って見ないか」とすすめられた。一瞬逡巡したが、熱心に勧められるので、青木一郎先生に御相談し、何とかお許しが出て、広井さんと共演する事になった。小鼓の稽古を始め、たのも広井さんのお勧めだったので、舞囃子を舞った事が無いので中の舞の型から覚える。面をつけた事も無いから、まず子どものおもちゃの面を五百円で買ってきた。そして能を見た帰り先輩の成川和夫さんに、記念に狸々の面を打って下さいよと虫の

良いお願いをし、それが今年の春に出来上がった。それまでは、小池反三さんから拝借して稽古。稽古場が無いので、能楽堂の第二舞台を借りて、廣井さんと一緒に稽古をした。幸清次郎先生も、下がり端からはじまって狸々全曲の稽古してくださった。青木先生の稽古は殊のほか厳しかった。注意された所を書き上げたら紙四枚にもなった。

さて当日。舞台に入った位置は良かったがタイムリングはぎりぎり、そのあと足数が足りなかったり、足拍子が少しずれたり、ヒラキがしっかり出来なかったり、謡の引きが足りなかったり、謡出しが早すぎたり、足が思うように前に出なかったり、舞っていてシマッタと思う事の連続だった。ただ、見所におられる何人かの方は、面の小さい目から見てわかった。舞台から落ちず方向が狂わず、舞台で後見の先生の手を煩わさなくて済んだ事はよかったが、鏡の間に入った時「なんでこんなに下手なんだろう」とくやしかった。でも皆さんの協力で舞い終えた事に心から感謝しております。

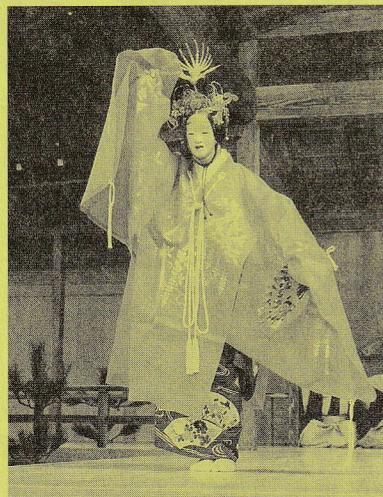
す。おめでとうございます。また、当日の地謡、囃子の先生方々に心から感謝申し上げます。

供養になった一番

観世流 市村 士久

能羽衣を舞い終えて故人を想う。明治も初期。まだどすか？ 姫さん男はんらと河原で相撲しはって、私らかなんわ！と下女達が着物の洗い張り、仕立てに追われる多忙極める日課に皆呆れての語り草であったと言う。遂には着物裾廻部分を袋仕立てとし、今日で言うワンタッチ方式に洗い替え容易になっていたとか。女らしく家敷内でシオシオ等真つ平御免と、蹴出迄端所って男女達相手に手毬投げ、石蹴等に興じて居た様である。事

程左様に宮家の姫らしからぬ振舞の腕白であった亡祖母。その因果応報か真面目厳格な宮役人(市村家)へ養女に出されたとの事。以後養父との係わりで謡曲を嗜み、元来の男負けじ氣質と風貌(骨格、声帯も男性的)から男性として能を演ずるに至った。後見役の頃、ええ、女が



檜にあつとったんか？と二大新聞に大きく報道、戦々恐々の非難を浴びたそう。以後女流No.1の評を戴いて活躍する姿の記事を叔父に見せて貰った記憶が今も残っている。私十代の頃「死土産に教えとく。さあ寒稽古だ。さあ〇〇だ」等と何故か先を急ぎ番数多く稽古つけてくれたが、父の能への嫌悪感と自身の無能感で諦めていた。私に能に憧憬と慕情にも似た思いを確かに感じたのは、ご当代が未だ学生さんの頃、恵比須のお宅にてご先代のお話「父の頃市村さんのお祖母さんは観世の四天王の一人だった」と聞かされた時、改めて祖母を認識し、私もいつか必ずと思ひ二十余年経過。先ずは我事業に猛進、五十五歳で見切り、目的実現の為時間的余裕あるサラリーマンに転身、幸此の度能楽連盟並びに師の手

厚きお導きにより演能成就。今年盆に良き供養が出来ました。ワキ席へ又橋掛りへノリ出した際、その美しさに思わず感涙したと評して下さった方がおりましたが、未だ未熟「羽衣」舞い終えて、幽玄の美一日にして成らざる感強く、伝統芸能の奥深きを再認識、今後尚一層努力の礎と致し度、存じて居ります。

紅葉狩

梅若会 堀内万紗子

「時雨をいそぐ紅葉狩。深き山路を尋ねん」アルトの地取の旋律が聞こえる時、私は今、お能を舞っていると言う実感に浸る瞬間でございました。

三人のおツレと声を合せ、拍子を合せ、そして心を合せ、楽しく思う時でもございました。初めてのお能を体験されたおツレの方々に感想を聞きました。一ツレの岡田美代子さんには次頁に書いて頂きました。二ツレの安田有子さんと三ツレの清水典子さんにインタビューをしてみました。それぞれ「お能に又、挑戦。そしてシテを演じてみたい」との、頼もしい言葉でした。若い方々が此の体験を、人生にも生かして、又伝統ある芸術を維持して頂く事を願う気持ちがいっぱいでございます。

始めての能

梅若会
宏枝会 岡田美代子

「静かに、静かに……、板目を真っすぐに行くのですよ」と優しくアドバイスして下さる恭行先生のお声に安心感と勇気とはげましの力を得て、一生懸命、板目を真っすぐに真っすぐに、と自分に言い聞かせながらシテの堀内先生の背中を見失わないように橋がかりから足袋のうららに神経を集中させ、橋がかりの板目と本舞台の境目を確かめて本舞台に進んだ。



始めて付ける面、靖記先生の本番前の行届いた御指導、「こ見えろ」、「こっちは」、「これは」と入念なチェックのもとに付けて頂いた面は非常に良く見えた。下稽古から何回か付けて頂いた中で一番良く見えた。まわりも行く手も、足元も安心感で全て見えた。橋がかりから本舞台へと、定位置に出て止まり、シテと向き合う為の中を向いたらピタッとシテと向き合えてホッとした。

能に出演するなど私の人生で考えても見なかった。健康にも恵まれ此のチャンスを得た事を心から神に感謝したい。先生の手とり足とりの御指導、此処迄引張って下さった努力と心遣いに対しても感謝したい。

此の度、始めて恭行先生にお目にかかり大きな力と優しさに出会い、喜びと感謝で一杯でした。横浜能楽連盟の中で観世梅若会をより大きく育てて行こうと、家元を始め沢山の先生方が一つになって私達の能を支えて下さった。有難い幸な事です。又今日迄応援し、観に来て下さった多くの友人、私の娘婿、娘にも心から有り難うとお礼を申します。

初めての能出演も多勢の方々の力と愛によって、つつがなく幕が下りました。

横浜能楽連盟創立五十周年

記念誌「お能と横浜」の

編集に携わって

記念誌編集委員
宝生流 秋山 尚

記念事業の三本柱の一つとして、記念誌の出版が企画された。これは横浜における能楽、謡曲の歴史的背景と今日まで発展の有様を諸々の角度から点綴した貴重な出版物になります。横浜能楽堂の山崎館長は「現代に生きる能」と題し明治、大正、昭和、平成に至る能楽界の変遷を、生き証人とも言える内容で語られている。新堀会長は貴重な膨大な資料と綿密なる調査をベースに、真に横浜能楽史として纏められており後世に残す大事なものとなっている。一方、能楽堂建設の経過については大平氏の詳細な記録、関係者による座談会で様々な苦労話や裏話が明かされ、更には著名人によるバックアップ体制の証言等が盛り込まれている。又、染井能舞台が横浜へとして平成六年、朝日新聞榊井記者がその推移を的確に報じている記事を取り込み、締め括りに横浜を舞台にした、能「六浦」と「放下僧」の解説を能評論家である西先生にお願いした。最後に各流派の現況を紹介してあります。この記念誌

は能楽に関する記事が広範囲に網羅されており、斯道謡友にはぜひ一読願えれば幸に存じます。前述三大記念事業が今回、神奈川県文化賞授与の荣誉に輝いたのも執筆各各位の大いなる健筆の賜物と深く感謝して居ります。

随想
久良岐舞台初代会長
宮越賢治氏をしのぶ

八十五翁 広井 徳平

宮越賢治氏より直接電話を頂いて馳せつけたのは、何の時だったか今の私にはどうしても思い出せません。

氏は、謡、舞、お囃子の全てをマスターされた方ですが私が伺ったのは大鼓のお相手をする事でした。その以前、磯子の大川(紀美姉)舞台で一緒にしたこともあるので気軽に呼んで頂いたわけです。笛は、波多野氏、小島氏が居られ、大鼓は阿蘇氏が引き受けて居られました。舞方としては、菅原氏ほか数名地謡は大連で、氏が面倒見られた寺内師(女性)を中心にかなりのメンバーが揃っていました。以後、会毎に一、二番舞囃子を演じていました。そのうち装束を着けてやろうと言うことになり、屋島、羽衣、高砂等を次々に演りましたが最後に宮越氏の

発案で

「能のはじめは草鞋を履いて

内庭でやったそうだ。

やってみよう

と言うことになり、邸内の高台を広く四角に草を刈り、池から橋掛りを長々とつけて、狸々がその池から現れたことにしました。お役は、寺内先生がシテのとき、私がワキを勤め、菅原氏にワキをお願いして、私がシテを舞わせて頂いた関係で、このときの狸々は私でした。

暑い暑い夏の正午近く、「草鞋能」と題して始まりましたが、宮越氏のご自分で造られた御自慢の唐船の甲板から指揮をとり、スピーカーからは大きめの音で下り端が流れてきました。狸々の装束を着けての草鞋履きは何としても様にならないのでワキが草鞋を履いてくれたのを幸に、私は用意した地下足袋の白をつけて、刈り揃えた雑草や竹のチクチクした上を歩きました。後で聞いた話ですが、五十人からの招待者の中に、淡島千景さんが居られたそうですが……。さて、宮越氏とはどんな御縁があったのでしょうか？

又、別にこんな話もあります。尺八の得意な宮越氏は虚無僧姿で、伊勢佐木町の街を一目入口から「鶴の巣ごもり」を吹いて流し歩いた時

「君の店で始めて
お布施をもらったよ」

と言われ勘違いして渡したことで冷汗をかきました。私がその場に居たら手を横にふっていたかも知れません。そのほかにピアノも弾かれ、車の運転もお好きだったそうです。

不二家で海謡会の打上げパーティーをやったとき、角砂糖をカリカリ齧りながらお酒を飲まれたのを見て驚きました。又、ザキの若旦那がホテル・ニューグランドで結婚披露宴をやったとき、お願いしたら快く舞囃子「高砂」の太鼓を打ってくれました。もっと驚いたことは観世会館で能、「芭蕉」のシテを舞われたとき出演前に受付の下に隠しておいた二合瓶をラッパ飲みして舞台上に立たれたことです。そして「雑念が消えてよい」と言って居りました。

そのとき新調した装束は亡くなられた観世左近師のお見立て、一回着用したまま観世家に納められたそうです。品のよい色合いが今でも目に残っています。宮越氏の想い出の舞台はこれが最後になってしまいました。又、ある時、下のお嬢さんとお二人で「中の舞」を連管されたことがあります。それはしみじみとした誠に素晴らしい音色でした。終わって見所に戻ら

れ、ボソッと：

「海謡会は、このまま今後もつづくかな」と言われました。私は大丈夫と答えたものの自信はありませんでした。

宮越氏の後を嗣ぐ浦部会長は宮越氏と特別御縁の深い方で、以後立派に喜多、観世をまとめて現在の地位を築かれました。宮越氏は今、どんなにか泉下で喜んで居られることでしょう。ここに、氏の想い出を綴り御冥福を祈ります。

(連盟監事)

会員の声

思いつくままだに

梅若・梅靖会 中戸 史子

七月に初めて、私はこの会です舞わせていただきました。四月末の例年の私達の会が終わってからの稽古で、私にとりましては順序を覚えるだけで精一杯でした。東中野の舞台とちがいが、見所が明るく、次々とお友達の顔が目に入り思わず下を向きそうになりました。先生方と共に能楽堂のこの大勢の方の暖かさが舞わせてくださったと思っております。

横浜市民になりました私は、三十数年、お仕舞の稽古始めて約十五年。私は横浜能楽堂のこ

の舞台が染井にあった時を知りません。初めて私がお能を拜見しましたのは、母に連れて行かれた、戦後間もない多摩川能楽堂でした。横浜能楽連盟と同じく五十年前に私の根っこが出来た。フツと気づいた時、舞わせていただいた幸せをより深く心に感じました。無意識に詩かれた種がいつの間にか芽を出した事に気がつきました。

そして今、私はこの限りなく奥深い魅力にとりつかれ、許される時間の中でお能を楽しみ、遅々とした歩みながら、謡、お仕舞、小鼓の稽古に励んでおります。一番先に始めたお仕舞の十五年という長さも、この世界ではホンの入口でしょうけれど稽古を続けることで、苦しみをのりこえる力と心の豊かさが得られたと実感しております。下手の横好きですが、出来ればこの道を歩み続けたいと思っております。

能楽堂だより

横浜能楽堂では、以下の通り公演、講座を開催します。

- 「第九回定期公演」十二月十九日(午後二時) 狂言「樋の酒」
- (和泉) 井上靖浩、能「葛城」
- (金春) 高橋汎、正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二

階二千五百円。十一月十五日(日)から発売。

- 「第五回特別公演」一月十五日(金)・(祝)午後二時。狂言「鍋八撥」(和泉) 野村万作、能「絵馬」(観世) 梅若六郎。正面五千円、脇正面三千五百円、中正面・二階三千円。十二月二十日(日)から発売。
- 「第十回定期公演」二月二十七日(土)午後二時。狂言「富士松」(大蔵) 山本則直、能「藤戸」(宝生) 近藤乾之助。正面三千五百円、脇正面三千円。中正面・二階二千五百円。一月十七日(日)から発売。

横浜能楽堂講座「能の周辺」

- 一 芸能の系譜 十一月二十二日(日) 講師 三隅治雄
- 二 能と地方能 十二月六日(日) 講師 三隅治雄
- 三 能と組踊 一月十日(日) 講師 三隅治雄
- 四 能と里神楽 一月二十三日(土) 講師 三隅治雄
- 五 能と歌舞伎 二月十四日(日) 講師 服部幸雄・片岡我當
- 六 能と地唄舞 三月七日(日) 講師 山崎有一郎・観世喜正・神崎ひで貴
- 七 能と人形浄瑠璃 三月十四日(日) 講師 山田庄一・豊竹英太夫・鶴澤清二郎・吉田養太郎

編集後記

▽横浜能楽連盟にとって、今年は大変佳いとしとなりました。連盟発足五十周年のとし。七月の能楽大会において会員に依る演能四番。記念誌の出版。神奈川県文化賞の受賞と素晴らしいことが重なりました。▽このことをきっかけにして、会員を増やし連盟のますますの発展に努めましょう。▽読者の投稿を待っています。「幽玄原稿」と表記して左記へお願いいたします。(MS記)



横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜市港南区丸山台二丁目233-0013 一九一七 新堀方
FAX ○四五―八四四―二九〇三
●電話の場合
横浜能楽堂 佐藤正美
TEL ○四五―二六三―三〇五〇

二千円 発売中